

『死線を越えて』 草稿と 賀川豊彦記念松沢資料館

杉浦 秀典

はじめに

- 1 賀川豊彦記念松沢資料館の紹介
- 2 小説『死線を越えて』の誕生
- 3 労働遺産に認定された『死線を越えて』下巻『壁の聲さく時』
おわりに

はじめに

2022年初頭、日本労働ベンクラブの認定事業である「労働遺産」の対象として、栄えある認定証をいただき、賀川豊彦記念松沢資料館の館員一同、望外の喜びに沸いた。

認定されたのは、賀川豊彦が書いた小説『死線を越えて』草稿に対してである。労働遺産と小説との結びつきには、事情をご存じない方には、いささか奇異に映るかもしれない。かいつまんで言うと、賀川豊彦という明治、大正、昭和に活躍した社会運動家が、神戸のスラムで貧困問題に取り組むなかで書き上げた小説のうち、労働運動を描いていたことに評価が与えられたということになる。(写真1～2)

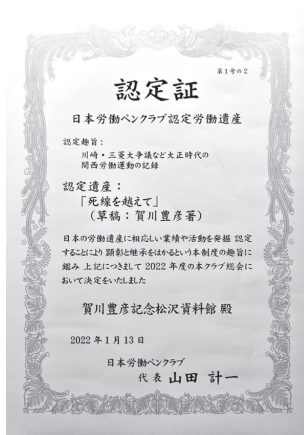


写真1 労働遺産認定証



写真2 賀川豊彦

同書は、貧困問題に取り組む賀川豊彦自身を小説内で主人公として登場させ、そのアバターを通じて、世の多くの人を知りえない、都市貧困層の実態を描いた作品である。文学的には「自伝小説」というジャンルに置かれる。大衆に方向性を持たせる「目的小説」と評されることもある。当時 100 万部を売り切った空前絶後の作品と言われながらも、文壇からの評価は低かったとされる。しかし、売れ続けた作品だった。なぜそれほど好評を博したのかについては、未だ説が定まらないのだが、同時代の空気、特に生活に困窮し未来を描けない若者たちに、共感と希望を与えたからだと言われている。あるいは、当時の風紀からみて、赤裸々に描かれた恋愛や性愛に対する葛藤に惹かれたからだとも言われている。

生涯にわたって小説を書き続けた賀川だが、実は戦後 1947 年と 1948 年に、2 回もノーベル文学賞の候補に挙げられている。スウェーデンのロイヤルアカデミーからの正式な推薦を受けてである。つまり『死線を越えて』、および、その他の賀川の文学作品（含詩集）は、海を越え世界の多くの人々にも読まれていたのである。残念ながら受賞は逃したが、さらに 1954 年、1955 年、1956 年には、ノルウェーのキリスト教界からの推薦により、ノーベル平和賞のノミネートをも受けることになった。こちらも諸事情により受賞は逃したが、1 人の人物がノーベル文学賞とノーベル平和賞の 2 つにノミネートされたことは、かなり珍しいのではないだろうか。

『死線を越えて』は、単作ではなく、連作であった。作品のシリーズ（本作 3 部、続作 1）において、当時の貧困問題とともに、その解決策としての労働運動が盛り込まれていることが、労働遺産に認定された理由であった。貧困救済（救貧）から、貧困化防止（防貧）へと運動の転換を図った賀川がまっしぐらに目指したのは、労働者の解放、すなわち労働組合を結成し、資本家に対抗することだった。労働市民の誕生を願った賀川は、自ら組合の先頭にたち、大正 8 年には、友誼団体「友愛会」の関西地区代表者となる。治安警察法 17 条により、今日のように自由に労働組合が活動できない時代に、指導者・知識人として活躍したのである。

労働運動への参加には、契機となる出来事があった。スラムでの救貧活動に資金的な限界を迎えた賀川は、1914～1917 年まで米国の名門プリンストン大学へ留学する。そこで学び終えた頃、ニューヨークの街角へ職探しに出た際、活みなぎる労働者の大デモンストレーションに遭遇した。その光景は、賀川の脳裏に焼き付き、その後の彼の行動を方向づけていくこととなる。

帰国を望むも、旅費を得る術もなく、たまたま紹介を受けて、ユタ州まではるばる訪れ、地域の日本人移民の農家たちで構成された日本人会の事務局で、書記を請け負うこととなる。やがて、日本人移民たちは、作物の買い付けを行う資本家によって、不利な立場に追いやられていることを賀川は知る。そしてその原因は、米国人農業従事者と日本人移民との間に、対立的な関係性があることを突き止め、その両者を結びつける働きかけを行った。そして資本家へ共同で「買い付け値段」の交渉を持ち込み、見事、生産者側に有利な金額を勝ち取った。この成功体験と報奨金とを手にして西海岸から帰国の途についた。そして、古巣の神戸のスラムへ戻り、妻とともに、旧来の救貧事業とともに新たに防貧事業を進めることになる。その主たる活動が、神戸友愛会の参加へとつながる労働運動の推進であった。

1920（大正 9）年、労働運動界にその名を知られる存在になっていた賀川だが、実は青年期に書き溜めてあった小説の原稿があることが、雑誌社の編集者に知られる。やがてその原稿は雑誌『改

造』へ掲載され、さらに単行本として刊行された。前半には青年期の思想と葛藤が描かれ、後半には神戸のスラムでの活躍が描かれた。それが『死線を越えて』（上巻）である。

本稿では、この『死線を越えて』シリーズを中心に述べていくが、その前に所蔵機関である、当館の成り立ちについてから、まずはご紹介してみよう。

1 賀川豊彦記念松沢資料館の紹介

（1）松沢資料館設立の経緯

1977年に「賀川豊彦生誕100年記念事業」が、各界へ呼びかけられ、その中心として賀川豊彦の資料館建設が盛り込まれた。これに合わせて募金活動が進められ、当初は1981（昭和56）年に完成を目指していた。しかし諸事情で遅れて1982年4月に建物の完成となり、同年10月2日からの開館となった。募金期間は1977年4月1日から1983年9月30日まで、寄付総額は3億1800万円、自己資金1億2500万円、総工費は4億4300万円である。1980年代前期におけるこの金額は驚く数字であり、賀川豊彦の名望が、没後20年を経てもまだ各界に及んでいたと言える。資料館設立に関するデータは以下の通りである。（写真3～5）

資料館建設世話人			
衆議院議員	石田 博 英	神戸商工会議所 会頭	外 島 健 吉
衆議院議員	稲 富 稜 人	国際基督教大学 学長	中 川 秀 泰
全国農業協同組合中央会 会長	岩 持 静 麻	日本生活協同組合連合会 会長	中 林 貞 男
主婦連合会 会長	奥 む め お	聖隷福祉事業団 会長	長谷川 保
東京神学大学 理事長	大 村 勇 吉	経済団体連合会 副会長	花 村 仁 八 郎
農林中央金庫 顧問（元理事長）	片 柳 真 吉	前全国農業協同組合中央会 会長	藤 田 三 郎
衆議院議員	河 上 民 雄	東京銀行相談役	堀 江 薫 雄
日本聖書協会 理事長	岸 千 年	衆議院議員 元内閣総理大臣	三 木 武 夫
東京医療生活協同組合 組合長	黒 川 泰 一	徳島県知事	三 木 申 三
日本ホーネス教団 名誉総理	車 田 秋 次	共栄火災海上保険相互会社相談役	宮 城 孝 治
兵庫県知事	坂 井 時 忠	神戸市長	宮 崎 辰 雄
東京都知事	鈴 木 俊 一	元衆議院副議長	三 宅 正 一
衆議院議員 内閣総理大臣	鈴 木 善 幸	明治学院 名誉学院長	武 藤 富 男
前徳島県知事	武 市 恭 信	株式会社三秀舎 代表取締役会長	山 岸 暎
鳴門市長	谷 光 次	湯浅電池株式会社 代表取締役社長	湯 浅 佑 一
参議院議員	戸 叶 武	衆議院議員	和 田 耕 作
（五十音順）以上			

写真3 資料館建設世話人

当時現職の総理大臣、鈴木善幸氏の名がある。



写真4（左）
資料館入口



写真5（右）
旧松沢教会礼拝堂

〔設立〕 1982 年 10 月 2 日

〔設計〕 アルテック総合建築設計 阿部勤氏

〔施工〕 株式会社竹中工務店

〔施主〕 財団法人雲柱社

〔所在地〕 世田谷区上北沢 3~8~19

〔面積〕 ①土地 2,007.97 m² (607 坪), ②建物 1,328.40 m² (341 坪), ③展示部 309.00 m², ④研究部 527.52 m², ⑤管理部 491.88 m²

(2) 名称の由来

当初は「賀川資料館」として、免税措置を旧大蔵省に申請したところ、個人を顕彰する事業とみなされるので、募金活動を行うのであれば一般的な名称にするよう助言を受けた。賀川豊彦は、関東大震災後の後半生は、世田谷区松沢村（当時の行政上の区域名称、現：上北沢）に住み続けたことから、当時の地名を取って「松沢資料館」を正式名称とした。ただし、それだと館の性格がわからないので、「賀川豊彦」を記念した松沢資料館とするため、「賀川豊彦記念・松沢資料館」となった。固有名詞に中黒が入るのには多少違和感もあったが、その後 30 年間この名称が続いた。やがて設置法人の財団法人雲柱社が 2012 年に公益財団法人へ移行した際に、中黒を外すことが行政より許され、以後は「賀川豊彦記念松沢資料館」が正式な館の名称となっている。

当館は法律적으로는博物館法に則った登録博物館である。私立博物館の多くは、博物館法上の「博物館類似施設」として運営することが多いのだが、当館は要件を満たしており、登録申請を行った。1980 年 11 月 10 日、博物館法第 11 条による博物館として申請し、建物と資料が完備した時点での登録が認められた。

登録に必要とされる定義は以下の通りである。

「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関で、博物館登録原簿に登録されたもの」

その他、登録博物館には、職員として館長および資格を持った学芸員を配置することや、年間 150 日以上の開館が義務づけられている。

(3) 「松沢資料館」の名称が語る館の性質

既述のように、当館は法律上「登録博物館」という、正規の博物館として位置づけられている。しかし、名称は「賀川豊彦記念・松沢博物館」ではなく「資料館」としている。教育的配慮に基づいて展示物を配置し、自己学習の機会を提供するのであれば「博物館」と名乗ればよいのだが、実は当館は、展示よりもむしろ資料を保存して、資料を利用に供することを設立計画の中心にしていた。それゆえ、法的には博物館だが、業務内容は博物館としての展示機能にとどまらず、資料の利

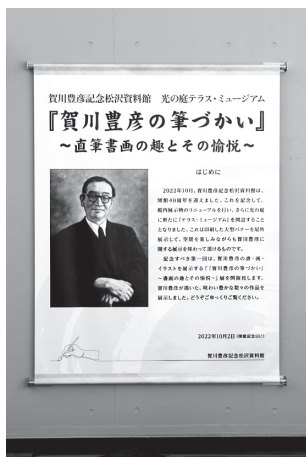


写真 6



写真 7

写真 6 資料館の中庭 に新設された バナー型展示	写真 7 展示場	
	写真 8 資料館の受付	写真 9 イメージパネル



写真 8



写真 9

用提供を行う「アーカイブズ」の機能を中心的な事業としている。

「アーカイブズ」とは、一般的に組織または個人が営んだ活動により生み出された記録、文書のなかから、重要な価値を持つものを将来のために保存し管理する施設を指す。資料そのものも「アーカイブズ」だが、機関や施設を指す場合も「アーカイブズ」と呼ばれる。さらに、資料管理のシステム機能をも「アーカイブズ」と呼ばれることもある。

ちなみに当館の英語表記は、“Kagawa Archives & Resource Center” となり、ここにも Museum（博物館）の表記はない。法律上は博物館だが、實際上、重点を置いている業務は、「アーカイブズ」としての資料管理と資料利用および資料研究にあるといえよう。

（4） 松沢資料館のアーカイブズ業務

通常、アーカイブズにおいては、固有の整理体系で管理されている。博物館における一般的な資料の整理方法としては主題分類や形体分類が行われているが、基本的にアーカイブズにおいては主題分類や形体分類は行わない。

近代的なアーカイブズ学では、分類ではなく「出所原則」が提唱され、資料群の出所を混乱させる「抜き出し」のような作業は控えている。その理由は、分類作業によって、資料が移管時に帯びていた個々の資料間の相互および前後の関係性や、作成元からどこに行こうとしていたのかというコンテキスト情報、作成した個人や機関等の情報、作成に至った構造情報などが、喪失されるのを防ぐためである。

当館でもアーカイブズ学の考え方に則り、原稿やノート、日記などの資料も、箱から出してそのまま番号を付与して管理している。移管された際にすでに箱にまとめられていたものは、そのまま管理するようにしている。図書資料等の収集も、テーマごとの分類は行わず、時系列に従ってすべ

て年代順に、書誌学的に配列して保管している。さらに、アーカイブズ学の原則である「原秩序尊重」および「原形保存」も順守している。

整理の基本は、目録を作成することを念頭に置きつつも、フォンド→シリーズ→アイテムという各階層構造ごとの記述をとるようにしている。これは資料群が持つ有機的構造を保持し、かつアイテム間の固有の関係性と潜在情報を保つために、移管前の構成を尊重している。

(5) 収蔵庫内における資料群の状況

1982年、松沢資料館が開館し、賀川家やその他関係者から文書資料が寄贈され、収蔵庫内に保管された。その後も関係者からの寄贈は続いている。以下は、当館で構築されたシリーズの種類である。

a 明治学院文庫シリーズ

このシリーズは、1960年にいったんは明治学院大学図書館に寄贈された賀川豊彦の蔵書約11,000点が、松沢資料館開設後に再移管されたものである。これは図書・雑誌であることから、通常はライブラリー機能として理解されがちであると思われるが、それらの多くに賀川自身の書き込みがされていることから、他にも同じものが存在する資料とは言えないため、これらの図書はアーカイブズとして扱っている。(写真10)

b 原資料シリーズ

このシリーズは賀川直筆の資料群であり、原稿、日記、メモ、書簡、スクラップブックなどである。当館が収蔵している資料のうち、最も貴重な一次資料群である。(写真11～12)



写真10



写真12

写真10 明治学院文庫	写真11 原資料庫	写真13 個人寄贈文庫
	写真12 整理途中の資料群	



写真13



写真 14-1, 14-2 (上) 約 7,000 枚の写真資料
表裏共にデジタル化済



写真 15 (下) ブックキーパーの噴霧
Bookkeeper 法脱酸処理, プリザベーション・テクノロジー社

c 個人寄贈シリーズ

個人寄贈シリーズは個人からの寄贈によるものである。賀川の関係者たちのご遺族から、多数の寄贈が行われた。これらの資料は移管時の配列を尊重しており、原秩序が尊重されている。つまり、現在配列されている状態は、移管前の所有者が施していた配列をそのまま反映している。(前頁写真 13)

d 写真資料

写真資料については、おおまかな分類が移管前になされていたが、内容調査はそれほど進んでいない。一般的に写真資料は、誰がいつどこで撮影し、誰がそこに写っているかなどの特定できる情報がなければ、資料価値が半減してしまうと言われている。(写真 14-1, 14-2)

e 保存科学

近代文書固有の課題である酸性紙の解決は、各地の資料保存機関を悩ませている。紙の酸化は、紙のセルロースが破壊されることが原因と言われるが、主に印刷インキのしみ止めのサイジング剤として、硫酸アルミニウムを混入させたことによると言われている。その対策として、アルカリ系の材質を化合させて中和をする「脱酸処理」作業を随時行っている。(写真 15)

2 小説『死線を越えて』の誕生

次頁写真 16 は、賀川豊彦手稿の原稿群の資料で、小説『死線を越えて』の基となった「再生」という作品の一枚である。原稿は手すき半紙に墨で書かれたものだが、主人公・新見栄一（賀川豊

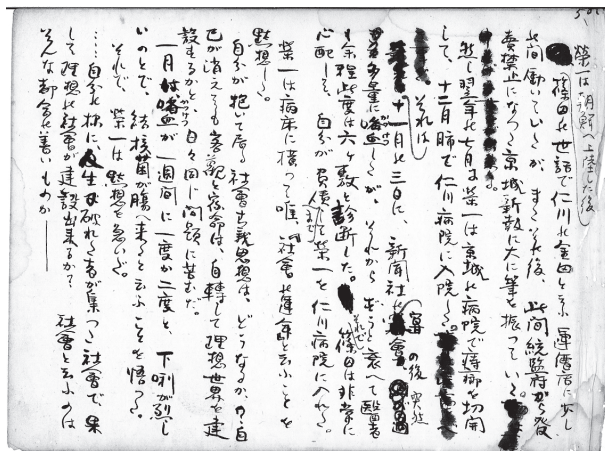


写真 16 「再生」の手稿

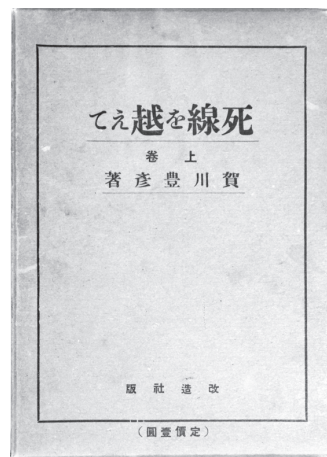


写真 17 改造社初の単行本として出版された『死線を越えて』



写真 18 『改造』第貳卷第壹号・大正九年壹月号の目次

彦の化身)の名前が出てくる。

小説『死線を越えて』の単行本が上梓されたのは1920年(大正9年)10月3日だが、これは雑誌『改造』の連載小説として計5回にわたって掲載されたものをまとめて同年秋に出版されたものである。(写真17)

写真18は当時の『改造』第貳卷第壹号・大正九年壹月号の目次で、賀川の「死線を越えて」が155頁にあることが記されている。よくみると右の頁には賀川の論文「人間建築論」があり、さらに中央左には沖野岩三郎の「予言者賀川豊彦君」もある。同号の他の執筆者をみると、武者小路実篤、堀利彦、幸田露伴、北原白秋、正宗白鳥、谷崎潤一郎……そうそうたる当時の文豪が居並ぶな

か、賀川豊彦関連の文章が3本も掲載されていることは驚きである。

武藤富男氏（『評伝賀川豊彦』キリスト新聞社）によれば、雑誌『雄弁』で沖野が賀川について書いたところ、改造社社長の山本実彦が着眼し、『改造』第壱巻第四号から毎号賀川の論文を掲載していったとある。その後、大阪毎日新聞社の村島帰之が、賀川の自伝的小説があると改造社編集長で早大同窓の横関愛造に紹介したことから、山本社長自ら神戸の賀川の家に向いて、賀川から千円で原稿を買い取り、掲載が始まったとのことである。

また猪瀬直樹氏は、『作家の誕生』（NHK 人間講座 2001 年 6～7 月期）において、「テニヲハは間違いだらけ～作家らは無視し続けた～」と、賀川に対する当時の文壇の反応を紹介している。一部には知られた社会運動家であっても、小説家としては取るに足らぬ表現しかできず、文豪たちの評価には値しなかったことが推察される。

しかしながら賀川の作品は、出版されるや瞬く間に売れに売れ、たちまちの増刷という好評ぶりだった。文芸的な尺度では未熟であっても、人々を感動させる内実が描かれていたことがうかがわれる。

上記の猪瀬氏の見解によれば、当時は 105 万部とも 400 万部とも言われていたが、それは 1 版での印刷を 5,000 部としているからであって、当時の印刷技術では 1,000～2,000 部がせいぜいで、実際には三部作と関連作を含めてはじめて 100 万部という数字が出るのだ、と分析している。一方、武藤氏の前掲書には、1 年で 210 版が出たとあり、もし仮に 1 版 2,000 部であっても 42 万部になることから、それだけでも驚異的な数字である。どちらの説であれ、大衆に対して多大な影響力があったことは確かであろう。

『死線を越えて』上巻が出版された時、すでに賀川は 32 歳であった。人生経験の積み重ねが映える作品に思えるが、実は『死線を越えて』は、賀川が若き日にすでに前半部を執筆し始めていたものに、スラムの出来事を加筆して完成した作品である。

肺結核を患っていた青年・賀川は、愛知県蒲郡群の漁村、府相で、療養生活中に「鳩の真似」と称して雑誌『成功』に墨で草稿を書いていたのが土台となった。鳩とは、聖書マタイによる福音書 10 章 16 節の言葉に由来している。

療養中の持て余す時間を注ぎ込んで小説を書き上げ、4 月には清書 57 枚に仕上げた。病に閉ざされたかに思えた人生の突破口を、賀川は小説に見出そうとしたのかもしれない。その願望の現れとして、賀川が 20 歳の時、時の作家であった島崎藤村を、同じ明治学院の先輩という誼から訪ねており、賀川自身がそのときの経緯を当時の幾つかの日記に書き残している。以下はその記述である。（次頁写真 19）

（1908（明治 41）年 5 月）「二十七日（木曜日）の朝、浅草新片町一番地の藤村を訪ねた。小さい家に藤村は住んでいる。直ぐ本居宣長の鈴家を思い出した。藤村は二階へ僕を通し「鳩の真似」を手にとった『余程ありますね、何ヶ月かかりました』と問うてきた。彼は文豪気取った先輩めいた句調で色々話した。僕は藤村の「歴史疑惑説」の小供臭いに驚いて失った。僕は小説家が嫌になったのだ。色々で一時間半計り二人は熱中して議論した。僕は八月の末でなければ、校閲しないと云う藤村を取って責めなかった。我輩の小説を現代の小説に比較

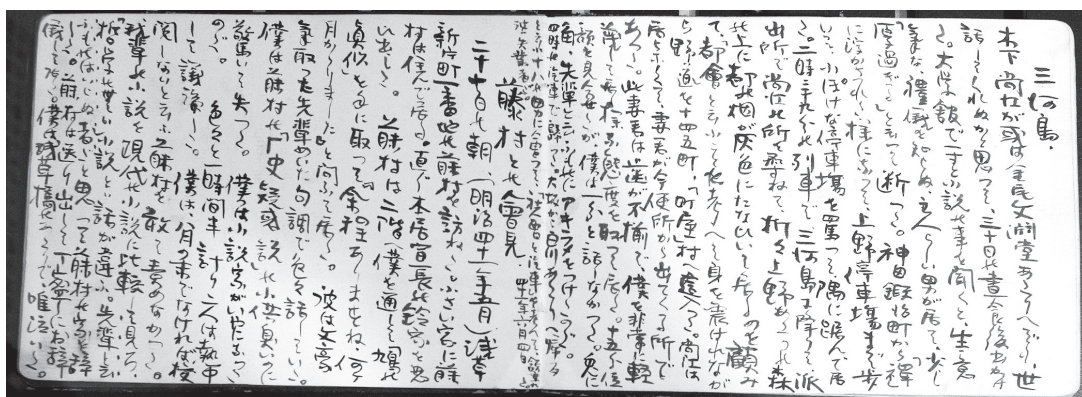


写真 19 島崎藤村を訪ねた時のことを書いた賀川の日記

して見ろ、「哲学の無い」小説と話が違ふ。先輩と云うものはいらぬ者だと思つて、藤村の家を辞した。藤村は送り出して丁寧にお辞儀していた。僕は浅草橋あたりで唯泣いた。」

このときの藤村の対応は、冷たい印象だと語られてきた。しかし、名の無い学生の賀川を家に上らせ、議論の相手をし、その後丁寧なお辞儀までして後輩を送り出した藤村には、決して冷遇の一言で済ませるような評価はできないのではないだろうか。しかし若い賀川にとっては、筆の立つ所を見出してもらい、出版社を紹介してもらうことで自信を回復し、療養生活からの心理的脱却を期待していたのかもしれない。

その後「鳩の真似」は賀川の元へ送り返されたが、藤村からは「……丁寧な手紙を添えて、数年間筐底に横たえて自分がよく判るようになってから世間に発表せよ……」と諭されたようである。この出来事の翌年 1909 年（明治 42 年）12 月 24 日、賀川は单身貧しい人々の暮らす神戸のスラムへ転居し、そこから数々の社会事業が始まっていった。その描写が『死線を越えて』上巻の後半部に描かれている。

賀川が若き日に描いた自伝小説は、そのままであれば、何も人の心を打つものではなかったかもしれない。しかし賀川は、鳩の「真似」で終わらず、小説の後半部に描かれている、自分自身を社会へ投じて活動を実践したことで、「死線」を越えた非凡な存在へと変わっていった。受動的に「真似」や「再生」をじっと待つ姿から、この世の悲惨の待つ世界に果敢に飛び込むことで「越え」ゆく、すなわち能動的な姿へと、自己の殻を破っていったのである。

さてその草稿「鳩の真似」は、蒲郡で初めて書き始めたのではなく、すでに明治学院在学中に「再生」という題で構想して部分的に書いていたものだった。賀川が綴った日記『矛盾録』にその記述が見出せる。ちなみに『死線を越えて』という表題は、本文 23 章で主人公の父が亡くなり、その葬儀の時に「彼は凡ての『死』の線を飛び越えて、因襲と姑息と伝統と迷妄と戦わねばならぬ……」との箇所から題名化された。

後に賀川自身が、『死線を越えて』を書いた動機」というエッセイを書いているが、そこには、「私の小さい胸に、過去の悲しい経験があまりに深刻に響いたことと、私が宗教的になっていくこ

とに依って非常に気持ちが変わってきたことを、どうしても小説体で書きたかった……」と回想している。この若き日の自己憐憫から、ある時「死線を越え」、貧困救済に目覚めて活動する移り変わりが、この小説には描かれているのである。

3 労働遺産に認定された『死線を越えて』下巻『壁の聲きく時』

『死線を越えて』上巻は、若き日の賀川がスラムで活躍する様を描いた記録文学として、今日でも当時の世情を知るうえでの貴重な資料とされている。しかし、大正9年に刊行された上巻では、賀川はまだ貧困と格闘する熱血青年として描かれたにすぎなかった。

続く『死線を越えて』中巻『太陽を射るもの』において、賀川はスラムの詳細な描写と、自らの内面の葛藤、さらに自己の結婚までも描いていく。（写真20）

主人公・新見栄一（賀川豊彦）は、自らが主宰するボランティア団体がスポンサーからの支援が途絶えることになったため、支援事業の縮小を余儀なくされた。新見こと賀川は、この機に米国留学を発起し、名門プリンストン大学で学究の時を迎えることとなる。

中巻の表題『太陽を射るもの』は留学時の出来事に由来している。当時、ニューヨーク州郊外の公園には、ネイティヴ・アメリカンの少年が太陽に向かって弓を射るブロンズ像が置かれていた。その像の主題は、ネイティヴ・アメリカンの族長は、その地位を受け継ぐ子に、太陽を射ぬかせて地位を譲るという故事に由来していた。賀川は、この像からインスピレーションを得て、理想の社会を築くものとして、太陽を射る志を自らに固く決意したのである。

やがて就学期間が終わり、帰国の費用を稼ごうと方々をめぐるうちに、ある時、ニューヨークの街頭で大規模な労働組合のデモ行進に遭遇する。本稿の冒頭部ですでに触れたが、この労働組合の勢いに魅せられた賀川は、帰国後の社会活動の構想をそこに見出した。そして、先ほどの太陽を射る少年のごとく、日本へ帰国したならば、「太陽を射る子」になると祈りつつ、帰国の途に就くのがあった。こうしてようやく『死線を越えて』中巻において、労働運動および労働組合が登場するが、それはまだ動機づけを描いたにすぎなかった。

『太陽を射るもの』では、神戸のスラムでの地域支援事業を継続していく姿が中心に描かれた。つまり中巻においてもまだ、賀川の内面における労働運動への決意までしか描かれていない。その意味では、『死線を越えて』の上巻、中巻までは、労働遺産に値するまでには、及んでいないと言えるのかもしれない。

賀川が目覚ましく関西の労働運動で活躍をみせるのは、『死線を越えて』下巻、『壁の聲きく時』からである。実はこのタイトル『壁の聲きく時』というのは、労働運動で1921（大正10）年に検挙された際の留置所での精神的な体験を題名化したものである。（次頁写真21、22）

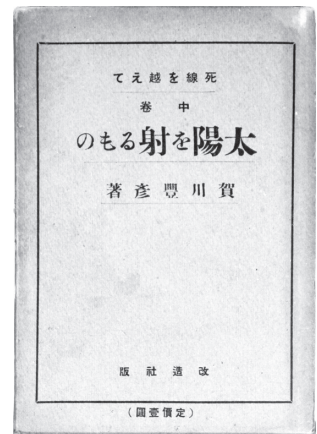


写真20 『死線を越えて』
中巻『太陽を射るもの』

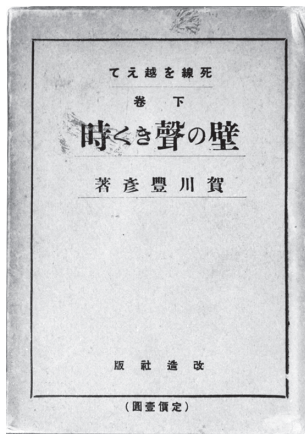


写真 21 『壁の聲きく時』



写真 22 『壁の聲きく時』の直筆原稿

これが実質労働遺産に認定された資料

常人であれば、警察の留置所へ入れられるだけで精神はかき乱され、不安や心配でじっとしてられないのではないだろうか。しかし賀川豊彦は、その留置場こそが静まって瞑想できる良好な環境だと楽しんだ。静けさを味わえることに喜びさえ覚えたのである。以下、その壁が語りかけるシーンを引用しよう。

「静かに、壁が彼に声をかけた。——『四囲の障壁は、魂の實在に取っては透明である』と。静かに、壁が囁いた。壁の上に印刻せられた爪先の楽書きが、凡て彼に物語を始めた。

在監の日を忘れないために、書き記された暦日を示す算用数字が踊りだして来た。今迄その監房に這った未決囚は、みな女だけに、優しい心の持主であったとみえて楽書までが誠に優しい、それらが凡て新見に発言を求めた。新見は一々その言葉に聞き入った。『人間—人間—人間』さう壁が云うた。人間の側に立つと、壁が人間化すると壁が云うた。

『私は無生物ではない。』と壁が云うた。

『此処に這って来てもね、自分を見捨てないものは捨てられはしませんよ……』こんなにも、壁が云うた。

周囲の壁は、新見に取っては、無生物ではなかった。それは女看守よりも親切な天使であった。神はそれを通じて物語った。」(原文ママ)

(『壁の聲きく時』『賀川豊彦全集』14巻、590頁)

賀川は、労働争議の首謀者として収監されながらも、その監獄すら、スラムの住居よりは静かで快適さを覚えた。そして、女性看守らとの短いやりとりの背後にある、親切心に感動し、『監獄は貧民窟より余程善い……愛ある処に神の国はいつでもある』と、トルストイ的な言葉で新見に独白させる。その後、先ほどの壁に語りかけられるシーンとなるのである。

このシーンは、常人には、賀川の夢想世界のこととしか理解できないかもしれない。しかし賀川にとっては、自分を責め囲む四方の壁すら、精神世界の境地に至れば、自分を阻む限界とはなら

ず、むしろ至福の境地を教えてくれるものと映ったようである。ここには禅の思想に通じるものを感じる。実際、賀川は、この収監時の描写で、瞑想を重ねている。端座し呼吸を整え、邪念を払い、概念の神すら心の底から排除したと書いている。これは禅宗の名言「仏に逢えば、仏を殺せ」を連想させる。禅僧が座禅の最中に仏の想念が浮かんでくれば、それは真実の自己を見出すのを惑わせるものだから、否定するという考えである。監獄のなかで賀川は悟りの境地に達したのであろう。

賀川は『死線を越えて』3作品すべてに、自身のエポック・メイキングともいうべき瞬間をタイトル化した。『死線を越えて』上巻では、「彼は凡ての「死」の線を飛び越えて、因襲と姑息と伝統と迷妄と戦わねばならぬ……」として、「貧困救済」に取り組む決意に至った。そして、中巻『太陽を射るもの』では、「……地を継ぐものは太陽を射ねばならぬ、灼熱の太陽に向いて弓を引き、理想の社会を射ねばならぬ……」として、今度は「社会改造」を決意した。そして下巻『壁の聲さく時』においては、宇宙的な次元に自己が開かれ融合する、新たな境地への経験を重ねた。これらの段階的な転換点を通じて、キリスト教社会主義者としての覚醒が深まり、「主体」的に世界の課題に向き合い働きかける姿を、モデルとして大衆へ提示していった。

そして今度は、それを読み味わう読者が感化され、自我を覚醒させ、自らもまた賀川のように社会へ働きかける「主体」化へと促されていく。それが目的小説と呼ばれる『死線を越えて』三部作なのである。「協同する主体」をつくる装置としての小説と言えるだろう。

賀川は、三菱・川崎大労働争議で、敗北を経験した。これを機に労働運動の表舞台からは身を引いていく。しかし困難を好機と捉える精神の賀川は、労働争議と同じ年に、神戸購買組合を設立する。これは戦後の「コープこうべ」として引き継がれていき、2021年には創設100周年を祝い、持続可能な事業が証明された生協として、高い評価を受けている。また労働争議の翌年1922（大正11）年には、日本農民組合を創設した。その後、1923（大正12）年に関東大震災が発生すると、東京へ駆けつけ、被災地ボランティアを組織し、さらにそこから購買組合、信用組合、そして医療協同組合を設立して、復興へとつながっていった。

おわりに

以上、顕彰機関である「賀川豊彦記念松沢資料館」と労働遺産に認定された『死線を越えて』草稿について紹介をしてきた。栄えある労働遺産に認定され、このような機会をいただけたことに感謝しつつ、多くの方々にご来館をいただけることを願っている。

賀川豊彦記念松沢資料館は2022年に開館40周年を迎え、展示のリニューアルを行った。また2023年は、関東大震災から100年を迎えることから、記念事業を企画している。今後とも関心を寄せていただければ幸いである。

（すぎうら・ひでのり 賀川豊彦記念松沢資料館副館長・学芸員）

【参考文献】

五十嵐伸治，佐野正人，千葉幸一郎，千葉正昭編（2011）『大正期宗教小説の流行——その背景と“いま”』
論創社

猪瀬直樹（2001）『NHK 人間講座 作家の誕生』NHK 出版

賀川豊彦（1964）『死線を越えて』『賀川豊彦全集』14 巻，キリスト新聞社

賀川豊彦（1964）『太陽を射るもの』『賀川豊彦全集』14 巻，キリスト新聞社

賀川豊彦（1964）『壁の聲きく時』『賀川豊彦全集』14 巻，キリスト新聞社

賀川豊彦（1964）『黎明を呼び醒ませ』『賀川豊彦全集』22 巻，キリスト新聞社

松原一枝（2000）『改造社と山本実彦』南方新社

武藤富男（1981）『評伝賀川豊彦』キリスト新聞社

横山春一（1959）『賀川豊彦傳』警醒社